

優秀賞

お父さん、おかえり

福岡大学経済学部2年 牟田彩乃

父が初めて四国に単身赴任をしてから、三年が過ぎた。私は現在、母と二人で生活している。それまでは、ずっと家族揃って生活していたため、最初は正直、不安だった。一家の大黒柱である父がいない家の中は、なんだかガランとしていた。

父が四国へ行つてから、毎日欠かさず続けていることがある。それは家族揃って食卓を囲むことだ。もちろん父は同じ空間にはいないが、画面越しに笑っている。そう、私たち家族は毎晩テレビ電話をしているのだ。テレビ電話をすることで、声のトーンや表情から相手がどんな気分にいるのかを読み取ることができる。なかなか会うことができない私たち家族にとって、画面越しにでも繋がることのできるこの時間はとても大切な時間である。父とはLINEでもやり取りするが、携帯の扱いに慣れていない父との会話は、友達と会話するようにスムーズにはいかない。既読がついてもしばらく返信がなく、スタンプひとつだけ送られてくることもある。そんな時、父の返信に対して、「何を送ろうか考えたけど、文章がまとまらずにスタンプを選んだのかな?」「それとも、ただ手短に済ませたかっただけ?」と、考えを巡らせるのもまた面白い。これは私の日常においての、密かな楽しみになっている。

父が遠く離れた場所で暮らしていても、心の距離は家族みんなまで過ごしていた時と変わらない。大切な人と会いたい時、声が聞きたい時、いとも簡単に相手と心を通わすことができる。この時代に生まれてきて、本当に良かった。新しい友達ができたこと、学食で食べたハンバーグが美味しかったこと、ふと見上げた空がとても綺麗だったこと、今日も話したいことが山ほどある。食卓について、母と二人スタンバイしていると、ちょうど携帯がバイブ音を立てて鳴りだした。

「お父さん、おかえり——」

今日も家族の団欒が始まる。